

プロフェッショナルの労働市場

『日本労働研究雑誌』編集委員会

「プロフェッショナル」という言葉は広い意味を持つが、本特集では「特定分野のすぐれた専門知識を有し、それで生計を立てる人々」のことを指す。例えば、弁護士や医師といった高度な資格をもつ人々や、研究者、調理師、音楽家、整体師といった人々などを念頭に置いている。

こうした人々は必ずしも特定の組織（企業）に縛られず、身につけた専門スキルで勝負する、という印象を私たちは抱くことが多い。「包丁一本　さらに巻いて　旅へ出るのも　板場の修業」とは、1960年に歌手・藤島恒夫が大ヒットさせた「月の法善寺横町」（作詞：十二村哲・作曲：飯田景広）の冒頭であるが、当時かなり広い職種で「頼りになるのは、組織ではなく自分の腕」という感覚が共有されていたと考えられる。その後、日本の労働市場は「内部化」の傾向を強めていくが、最近では再び「プロ」として生きていくこと、そしてその「プロ」の養成プロセスへの関心が高まっているように思われる。

第1に、専門的・技術的な職業にたずさわる人々が増えてきた。そうした人々のなかには、職人のように「腕」で勝負するわけではないが、高度な専門知識を自身の武器として生きていく人も多く含まれているだろう。

第2に、厳しい不況が続くなかで、最近では人々の間で企業組織への信頼に揺らぎが見えている。そのため、いざというときに自分を守るために資格取得を目指すワーキングパーソンは多く、また就職を控えた大学生の「資格ブーム」も続いている。これらは、資格の取得が高度な専門知識の習得証明として社会に通用するという前提があるためだと思われる。

第3に、「専門知識型」のプロフェッショナルの代表とも言える、医師、法曹、（広い意味での）研究職の養成に問題が生じているという認識が広まりつつある。医師については、いわゆる医師不足の問題、法曹については、法科大学院（ロースクール）の混乱とも

言える状況、そして研究職については、博士を取得しても安定的な仕事のない「高学歴ワーキングプア」問題などが挙げられる。

そこで本特集では、資格のあり方、職種別労働市場への視点なども含めた広い観点から、今日的なプロフェッショナルの労働市場を取り上げることにした。その際、医師、法曹、博士人材といった、特に注目される高度専門職については、個別に深く掘り下げる論文を集めた。

まず、戸田淳仁「職種経験はどれだけ重要になっているのか——職種特殊的人的資本の観点から」は、職種経験が労働者の移動や報酬の決定に及ぼす影響を、公表データを駆使して分析している。1990年代初めから最近までの『雇用動向調査』を用いて同一職種内への転職の動向を調べたところ、前職が専門的・技術的職業従事者や事務従事者で同じ職種への転職者割合が高くなっていた。また、回帰分析の結果、高学歴者が多い職種においては、同一職種に転職しやすいことを見出した。さらに、『賃金構造基本統計調査』を用いて賃金関数を推計したところ、職種経験が賃金に及ぼす影響は年齢の影響よりも大きく、女性については専門的・技術的職業の効果最近在るにつれ高まっていることを明らかにした。戸田論文の結論は、おそらく2つのことを示唆していると思われる。ひとつは、職種特殊的な人的資本の形成が労働移動や賃金を規定していることであり、もうひとつは、その規定の程度が専門的・技術的職業において近年やや高まっている可能性がある、ということである。職種に焦点を当てることの重要性、そして職種についてのデータをより整備する必要を再認識させる論考である。

プロであることを証明するものとして国家資格等の様々な資格があるという見方があるが、それらの資格はどのように機能しているのだろうか。阿形健司「職業資格の効用をどう捉えるか」は、「資格がどのように役立っているのか」（これを阿形論文は資格の「効

用」と名付けている) という観点から、既存研究を整理・展望するとともに、2005年『社会階層と社会移動(SSM)日本調査』データを利用した実証分析を行っている。最初に、資格の「効用」を「個人-組織」、「選抜-育成」という2つの軸によって定まる4つの象限で整理している。例えば、企業が採用や昇進における評価基準として資格を用いれば、それは「組織-選抜」象限における役割を果たしていることになる。そうした分類を用いて既存研究を展望した後、データを用いた回帰分析が行われている。結論としては、職業資格の保持が、収入、常雇いになる確率、大規模企業に勤務する確率にプラスの影響をもたらしている形跡はほとんど見られなかった。阿形論文の結論は、多くの仕事にとって、「その道のプロ」として認知されるために必要な能力と、資格によって保障される能力との間に決定的な差異が存在することを示しているのかもしれない、このあたりの詳細は今後の興味深い研究テーマとなりうるだろう。

続いての4つの論文は、代表的なプロフェッショナルとしての職種を取り上げて、そこで生じている問題を分析したものである。まず、吉田あつし「医師のキャリア形成と医師不足」は、医師のキャリア形成をつぶさに明らかにするとともに、現在大きな社会問題となっている医師不足問題の原因を解明しようとしている。従来、医師の世界では、医局が民間病院への医師の供給に独占力を発揮してきた。ところが、2004年に卒後臨床研修制度が導入されて以来、病院が新卒者を直接リクルートすることが可能となった結果、新卒医師が医局に入らない傾向が強まってきている。今後も、医局ネットワークが医師のキャリア形成に果たす役割は小さくなっていくと予想される。また、需要に対して医師総数が足りないという形の医師不足が生じているならば、医師になることによる内部収益率が大きくなるはずであるが、そうした傾向は見いだせなかった。むしろ、最近増えてきた女性医師が特定の診療科を嗜好したり、早い段階で診療所勤務になったりすることなどが、外科、産科・小児科、麻酔科といった特定の診療科における医師の不足を招いている側面があることを指摘している。

吉田論文で明らかにされた、女性勤務医が比較的早い段階で診療所に仕事の間を移してしまう傾向は、勤

務医の労働実態が過酷であり、労働者としての立場が十分に守られていないことも一因となっている可能性がある。水島郁子「勤務医に関する労働法上の諸問題」は、勤務医が当事者となった裁判例を通して、勤務医の労働者性、労働時間、労働災害、解雇の各テーマについて労働法からの観点から検討している。勤務医が労働者であることは間違いなく、その適用が争われることはないが、自分が労働者であるという意識が勤務医に薄い傾向がある。また、労働時間については宿日直業務が争点になることが多い。それに加えて、労働災害における業務の過重性判断では、勤務医の業務は患者の健康や生命に直接かわるものなので、他の一般的な労働者に比べると心理的負荷が大きいと認められる傾向がある。さらに、解雇の社会的相当性判断においても、医師としての高い能力と適格性を欠いた場合には解雇を有効とするという判例が示されており、高度な専門的職務についている者に対する社会的な要請が反映されているといえる。吉田論文と水島論文は、それぞれ医師労働市場を理解するうえでの重要な論点を的確に提示しており、貴重な貢献であるといえよう。

医師と並んできわめて高度な資格業務が法曹である。木下富夫「法曹養成メカニズムの問題点について——経済学的観点から」は、法曹養成制度と法科大学院制度を、司法にたずさわることを希望する学生たちが教育投資を行う場として捉える必要があることを強調する。現在、法科大学院が乱立し、司法試験合格率は3割を下回ってしまっているが、そこには制度設計において司法(弁護士会や法務省)、文部科学省、そして各大学がそれぞれ独自の利益を追求したために、本来は主人公であるはずの学生の立場が置き去りにされてしまったという問題があると指摘する。また、旧制度に比べて司法試験合格年齢が遅くなること、法科大学院修了が受験資格となることで授業料等の負担が大きくなっていること、法科大学院に拘束することで勉学に対して画一的なパターンを強めていることなどの理由から、旧司法試験制度のもとで司法研修所の規模を拡大した方が新制度よりも優れていたという結論を導き出している。なお、木下論文は、司法試験の総合試験成績分布を検証することで、受験生の平均能力が2007年から2009年まで同程度であったとすると、合格基準がこの3年間で高まっていることになると主張

している。本来は資格試験であるはずの司法試験が、実態は競争試験となってしまうのではないかと、いう指摘は、資格一般のあり方を考える上で重要なものと思われる。

最後に、小林信一「プロフェッショナルとしての博士——博士人材の初期キャリアの現状と課題」は、大学院における博士号取得者を「博士人材」として労働市場に位置づけようとする試みを行っている。現在、博士取得者の大学教員や他の研究職への就職状況が悪化していることから、博士課程の供給過剰を説く論調が強い。しかし、これは現在の統計が博士人材の就職や職業の実態を必ずしも適切に反映していないことによる側面があるとする。そして、博士課程の最終目標を少数の学術的リーダーの養成ととらえた従来の狭い

見方（パイプラインモデル）ではなく、科学技術者のキャリアの多様性に注目して「一つの職業だが、キャリアは多様」といった新しい博士像（ツリーモデル）が登場しつつあると指摘する。実態としても、アカデミックな人材育成のための大学院が幅広い社会への人材輩出機能を担いつつあることが明らかであり、そうした視点に基づいてポストク問題などをあらためて吟味する必要性を説いている。小林論文は、「専門職としての博士人材」を明確に打ち出した興味深い論文であり、今後はそうした博士人材のキャリア全体を包括できるようなデータの収集と分析が求められる。

責任編集 大内伸哉・太田聰一・川口大司
(解題執筆 太田聰一)